

序文

フランソワ・ラストイエ

イエルムスレウの仕事は特異的な評価を受けていた。多くの言語学者が20世紀とともに生まれて世代をなしたが、そのなかでもイエルムスレウは、ことフランスにおいて、厳密な意味での言語学を超える名声を獲得したひとりに数えられる。

それにもかかわらず、フランスの一般読者がイエルムスレウの著作を容易に入手できるようになったのは、1965年にイエルムスレウが逝去した後からである。『言葉』〔邦題は『言語学入門』〕(1966), 『言語理論序説』〔邦題は『言語理論の確立をめぐる』〕(1968-1971), 『言語学試論』(1971)のことを思い浮かべてほしい。⁽¹⁾これらの著作は、出版されるとすぐに、ラカン、デリダ、ルクレール、ドゥルーズとガタリ、リクールなどのさまざまな作家によって参照されることとなった。⁽²⁾

しかしながら、本書に収められた仕事はほとんど評価されておらず、さらに言えば、その存在を知られてすらいなかった。そのため私は、『言語学試論』の復刊によってフランスでの主要著作の出版は達成されたのだと、その当時は誤って書いてしまった。実際、その後デンマークでは3冊の遺稿集が出版された。その1冊が『言語学試論II』(1973)であり、そこには、2つの未発表論文が収められているほか、3カ国語ですでに発表されていた論文や、4人の偉大なデンマーク人言語学者(ラスムス・ラスク、ヴィルヘルム・トムセン、ホルガー・ペデルセン、オットー・イエスペルセン)にかんする研究論文が⁽³⁾集められている。2冊目は『言語体系と言語変化』〔*Sprogssystem og sprogforandering*〕(1973)であり、これに『言語理論のレジ

ユメ』〔*Résumé of a theory of language*〕(1975)が続いている。これらの未発表著作のテキストは、バークリー大学教授、フランシス・ウィットフィールド氏が故人の資料を調査して編纂したものである⁽⁴⁾。

さらに、イエルムスレウの思想が人気を獲得したおかげで、入手困難になっていた2つの重要な書籍が再版された。すなわち、『一般文法の原理』(1928)のスペイン語訳(*Principios de Gramática general*, Madrid, Gredos, 1976)と、フランス語原文である『格のカテゴリー』〔*La catégorie des cas*〕(1935-1937)の再版(Munich, Wilhelm Fink Verlag, 1972)である。

今や、イエルムスレウの主要著作のすべてが出版ないし再版されたのであるから、かれの業績とその思考の展開について、より明確な展望を描くことができる。そのためには、広く共有されてはいるが性急でもある見解のいくつかを再検討することにはなるであろう。

奇妙に思えることだが、イエルムスレウには追従する者があまりいなかった。そのため、かれの教育によって今日よく知られる言語学者が育成されたにもかかわらず、厳密な意味での弟子は数えるほどしかない⁽⁵⁾。イエルムスレウの影響は、別のところではたらいていたのである。それというのも、かれの言語理論である言語素論〔*glossématique*〕は、言語学を超える射程をもち、一般記号論の基礎づけに寄与するものだからであり、さらに言えば、その認識論的な革新性は社会科学全体の興味を引くものだからである。

まずはじめに、言語学の内部でのイエルムスレウの立ち位置を明確にしておこう。

ソシュールは、構造と機能の言語学の創始者とみなされてきた。かれが計画した『講義』は「言語学の内部革命」(*Essais linguistiques*, p. 99)をもたらしただけだが、イエルムスレウはそこから出発して自らの理論を練り上げている⁽⁶⁾。要するに、イエルムスレウは、ソシュールの切斷を不可逆的なものにした人物とみなされているのである。よく知られているように、切斷という観念は、アルチュセールがカンギレムとバシュラールの研究に基づいて練り上げた観念であり、先行する非科学的でイデオロギー的な思弁との断絶による科学的な学問の誕生の記述に用いられるものである。とすれば、ソシュールは、歴史と比較の言語学を一掃して、近代言語学を創設したことになるだ

ろう。⁽⁷⁾このように事実を解釈することは、おそらく、社会革命を美化したモデルにしたがって科学革命を思考しようとする欲望と一致している。しかしながら、そのような単純化によっては、言語学の歴史を考慮できるようにはならない。

ポスト・ソシュールの言語学は、とくにラスクとグリムに発する比較言語学と根本的に決別するものではない。イエルクスレウは、同郷人であるラスクの仕事についての鋭い研究論文を執筆し、ラスクの比較言語学が厳密に言えば発生的ではなく一般的であることを明確に示している。そのうえ、イエルクスレウは、それ以前の時代の一般文法の論理主義をおそらくは仄めかして、こう強調している。「ラスクが望むのは、一般文法が経験論的であることであり、一般文法を言語そのものと無関係な原理からは演繹してしまわないことである。それゆえに、ラスクは論理学に基づいたア・プリオリな言語学にはとくに警戒するよう忠告している⁽⁸⁾のである」。この意味で、ラスクの仕事は、根本的には現代の一般言語学とプロジェクトを共有しているのだ。

イエルクスレウは、19世紀の言語学を歴史的な意味に還元することを避けているが、それはそのうえで、ソシュールによる印欧言語学への貢献を正当に評価しようとしているからである。伝記では、小説的な物語にしばしば屈して、こう主張されている。ソシュールは、歴史と比較の言語学において輝かしいデビューを飾ったのち、30年にわたりほとんど沈黙してしまい、その後、近代的な一般言語学を突然に作り上げた、と。イエルクスレウはこれとは反対に、いかにソシュールの『講義』があの名高い『印欧語族における母音の原始的体系にかんする覚書』（ライプツィヒ、1879）から理論的な帰結を引き出したのかを示している。要するに、ポスト・ソシュールの構造言語学は、少なくとも部分的には、印欧語族の母音体系についての考察を源泉にもつのである。

『覚書』と『講義』の間には、いかなる断絶もないが、深化はある。ソシュールが示すところによると、いわゆる長母音は、短母音と、A*と表される仮説上の単位との組み合わせに還元できる。この単位は、あらゆる経験から独立して仮定されたものであるため、音声学的には解釈されなかったのだが、ソシュールの死後に、ヒッタイト語において実際に確認された。この単位は、他の母音の単位間との関係と、音節中の位置によってのみ定義されるものであ

る。イエラムスレウの指摘によれば、「ソシュールが導入した A は、音声的価値ではなく、代数学的な価値のこと」(本書 p. 166) なのであり、ソシュールは音素を「音声ではないが音声によって表出されたり表象されたりする単位」(*Essais linguistiques*, p. 37) と定義している。ここには、イエラムスレウの理論で本質的な役割を果たす(「代数学的な」)形式〔*forme*〕と(音声的な)実質〔*substance*〕の対立が認められる。

より一般的に言えば、イエラムスレウは伝統に属していることを自覚している。かれは『序説』を書いていた時期に、こうも指摘していた。すなわち、さまざまな言語の系譜的親縁関係〔*parenté génétique*〕の理論が「決定的な成果」を挙げており、「この 19 世紀の古典が置いた礎石こそが、今日の言語学を支配する批判的な問題提起へと導いたのである」(*Le langage*, p. 27 [『言語学入門』 p. 6]) と。そして、他の研究分野においても同じことが言われている。すなわち、「古典的な言語学者が音韻論と形態論の分野で用いた実践的方法と、構造言語学が用いた方法とを偏見をもたずに比較すれば、断絶よりもむしろ連続があることに気づかされる」(*Essais linguistiques*, p. 105) と。

比較と歴史の言語学を、構造と機能の言語学と図式的に対立させるなら、イエラムスレウの仕事の統一性は捉えられなくなるだろう。たしかに、本書が示しているように、イエラムスレウの仕事は一見すると、これらの「動向」のどちらか一方に結びついているようである。『言語理論のレジユメ』と「印欧語の音声体系についての見解」のどこに、一目で分かるような共通点があるのか。

イエラムスレウは 1935 年に『格のカテゴリー』の序文で、この問いに力強く明晰に答えている。「私たちの考えでは、[……] 言語学を比較言語学と一般言語学に分けることは辞めなければならない。総合的な手法で、事実のすべてを包括する必要があるのだ。かくして「一般文法」は、「統語論」の分野では説明されてこなかった進化の問題の解明に役立つことだろう。これからは、印欧語族の言語学は、一般言語学を基礎にして築かれるだろうし、進化言語学は共時言語学を基礎に築き上げられるだろう」(p. III)。

イエラムスレウは、言語学の全分野を共通の基礎によって統一するだけの強力な理論を作り出し、さらに後年には、一般記号論を創設するに足る理論を作り出しているが、つまるところ、そうすることで、比較と歴史の言語学

が1世紀以上前から推し進めてきた研究を深めようとしているのである。

ただし、イエルクスレウは、言葉にかんする一般理論が諸々の言語にかんする研究を率いるのだと明言している。「機能にかんする一般的な言語学が必要なのであって、この言語学は個々の体系がもつ細部からは独立しており、そうであるがゆえに、専門的な言語学が採用する定義に必要な修正を与えることができる。さらに言えば、あらゆる専門的な言語学は、この言語学の応用でしかないだろう」(« Accent, intonation, quantité », 1937, in *Essais linguistique II*, p. 175)。続くページで、この機能的な言語学が言語素論と名づけられている。

さらに、共時的な研究は、通時的な研究を率いてこれに先行するものである。イエルクスレウは、格のカテゴリーを研究するなかで次のように指摘している。「共時論の部門の研究が終了してはじめて、私たちは進化の問題に移ることができるのであり、印欧語族の比較研究のために私たちの理論から引き出すべき帰結を検討できるのである」(*ibid.*)。このようなアプローチは次のように一般化される。すなわち、「信頼に足る唯一の方法は、共時論の観点から説明できることはすべてこの観点に収め、それでも説明できないものだけを進化論の観点に移すことである」(*Essais linguistiques II*, p. 211)。共時論と通時論の区別が相容れないものだと思えるのは、見かけ上のことにすぎない。実際、内在通時論〔*métachronie*〕という独創的な概念がこの区別を包摂している。「[……] 内在的な方法は、体系の研究だけでなく変化の研究にも用いることができる。こうして、共時論と通時論の二元論は決定的に乗り越えられるだろう。言語体系の進化は、ひとつひとつの要素を切り離してその進化を考察する通時論によっては説明できないのであって、内在通時論と名づけられる全体論的で系統学的な観点から説明されるだろう。さまざまな体系を抽象する通時論とは反対に、内在通時論は、複数の継起的な体系を説明的に並置することでことにあたるのだ」(*La catégorie des cas*, p. 110)。

言語素論と印欧言語学のつながりを理解できるのは、純粋に記述的な文献学から風刺的なイメージが取り除かれるときだけである。イエルクスレウにとって、印欧祖語は仮説モデルの役割を果たしている。「印欧祖語のものと想定される表出は、歴史的に確認された言語において観察された表出から導き出される。したがって、印欧祖語の存在は完全に仮説的なものであり、証